

第11回

ようざん認知症介護事例発表会

本日の事例発表の際のスライドで使用される写真など個人情報につきましては、本人並びにご家族の同意とご了承を頂いております。事例発表は、本人とご家族、職員が一体になって取り組んでこそ大きな成果を得られるものです。本日の発表に向けて頂戴しました、ご家族の温かいご理解と深甚なご協力に対し心から感謝を申し上げます。大変ありがとうございました。

今回事例発表させて頂く7事例は、下記の32事例から選抜された優秀事例です。
ケアサポートセンターようざんのホームページにすべての事例を掲載しています。

- | | |
|---|-------------------|
| 1.綺麗にしておきたい！・・・のだけど | ケアサポートセンターようざん藤塚 |
| 2.「大丈夫」言葉の背景を探る | ケアサポートセンターようざん並榎 |
| 3.ありがとう!!勘弁してください | ケアサポートセンターようざん飯塚 |
| 4.「見えない」に負けない 明日へ続く光 | ケアサポートセンターようざん中居 |
| 5.ストレングスモデル | ケアサポートセンターようざん栗崎 |
| 6.～ただ、穏やかな気持ちで過ごしたい～ | ケアサポートセンターようざん倉賀野 |
| 7.今日もよろしくお願いします。 | ケアサポートセンターようざん貝沢 |
| 8.「特別」じゃない「当たり前」のこと。 | ケアサポートセンターようざん双葉 |
| 9.「ありがとうございます。助かりました！」 | ケアサポートセンターようざん石原 |
| 10.家族との絆～ハートフルケア～ | ケアサポートセンターようざん |
| 11.Aさんの「夕方になったから家の仕事をしないといけないなので帰ります。」の意味を知る。 | ケアサポートセンターようざん大類 |
| 12.俺のやりてえ事は… | ケアサポートセンターようざん小埜 |
| 13.気力の火 ～生きる力を最大限に発揮して頂く為には～ | スーパーデイようざん小埜 |
| 14.いつまでも通いたい ～私達に出来る事～ | スーパーデイ貝沢 |
| 15.みんなで一緒に笑おうよ | デイサービスぽから |
| 16.バリデーションから学ぶ介護の原点 | スーパーデイようざん石原 |
| 17.「布パンツで過ごしたい！」 | スーパーデイようざん栗崎 |
| 18.ここはどこ？埼玉だっけ？ | スーパーデイようざん |
| 19.ずっと、ようざんに通いたい | スーパーデイようざん双葉 |
| 20.認知症介護に一生懸命です！！ | デイサービスようざん並榎 |
| 21.「こころの支え」～信頼関係がもたらすもの～ | 居宅介護支援事業所ようざん |
| 22.「安心と満足」 | グループホームようざん |
| 23.B P S D夜間せん妄が強い利用者様を多角的にケアして | ショートステイようざん並榎 |
| 24.定期巡回・随時対応型訪問介護看護と在宅で緩和ケア「最後まで自分らしく暮らしたい」 | ナーシングホームようざん |
| 25.「見守りすることの大切さ～A様の為に私達に出来る支援～」 | グループホームようざん倉賀野 |
| 26.自分らしさを取り戻すために ◇コミュニケーション◇ | 特別養護老人ホーム アダージオ |
| 27.私に仕事をください | ショートステイようざん |
| 28.「今も私は現役公務員」慣れない生活と不安な日々～話を傾聴し思いを受容した日々～ | 特別養護老人ホーム モデラート |
| 29.お互いの想い～散歩でつなぐ家族の絆～ | グループホームようざん栗崎 |
| 30.「きーちゃん」と共に生きる | 特別養護老人ホームアンダンテ |
| 31.「オレの気持ちをわかってもらいたい」その人らしい生活を目指して | グループホームようざん飯塚 |
| 32.Life rich～生活の豊かさji～ | グランツようざん |

目次

家族との絆 ～ハートフルケア～

ケアサポートセンターようざん p.1

「見えない」に負けない 明日へ続く光～故郷へ想いをはせて～

ケアサポートセンターようざん中居 p.5

「バリデーションから学ぶ介護の原点」～寄り添うことの大切さ～

スーパーデイようざん石原 p.9

「特別」じゃない「当たり前」のこと。

ケアサポートセンターようざん双葉 p.13

『認知症介護に一生懸命です！！』～心に響くケアを目指して～

デイサービスようざん並榎 p.16

私に仕事をください

ショートステイようざん p.21

「きーちゃん」と共に生きる

特別養護老人ホームアンダンテ p.24

家族との絆

～ハートフルケア～

ケアサポートセンターようざん

発表者：金田 唯

柏原 秀人

【はじめに】

今回紹介させていただく A 様は、ようざん利用開始時にご家族と一緒に生活していました。徘徊等の周辺症状が見られながらも、ご家族の熱心な介護により在宅での生活が送れていました。そんなある日、尿路感染の疑いで病院に入院することになりました。入院生活の中で経口からの食事摂取は困難と判断され経管栄養となり退院されました。退院後はようざんとご自宅を行き来したいというご家族の意向がありました。そんな中での A 様本人とご家族とようざんの関わりについて紹介させていただきます。

【利用者様紹介】

氏名：A様 年齢：82 歳 性別：女性 介護度：要介護5

既往歴：C型肝炎、尿管結石、尿路感染による腎盂腎炎、認知症、脳梗塞による失語・右片麻痺

生活歴：実家は酒屋を営んでいました。A市の文化服装学院を卒業、裁縫や細かい作業を得意としていました。

亡夫とは見合い結婚、1男1女を儲けました。

郵便局に勤務していた夫が自営を開始し、懸命に手伝っていたそうです。

現在は長男夫婦が後継者となり、孫の子守をすることが自らの役割になっていました。

【施設利用の経緯】

平成 29 年 9 月 20 日に脳梗塞で入院されました。当初は入所施設を勧められたそうですが、家族が在宅を希望し、小規模がベストだと判断したそうです。

平成 29 年 12 月 23 日に退院され、本人の様子観察をするため、一週間後に一時帰宅を目標とし利用開始となりました。

利用開始当初は徘徊、異食、感情失禁などがあり、目が離せない状態でした。家族と相談し、精神科に往診していただき内服調整で様子を見ることになりました。時折、感情失禁などあるものの一週間後には自宅へ帰ることができました。

その後は、家族の熱心な介護もあり通いと泊まりを繰り返し在宅生活が送れていました。

平成 30 年 9 月 11 日に尿路感染症で入院されました。入院中、尿路感染を頻回に繰り返す、意識障害、けいれん発作などの影響で経口摂取が困難となり、経鼻経管栄養が開始されました。

平成 30 年 11 月 15 日に家族の強い希望もあり退院され、そして現在泊まりを中心にようざんを利

用されています。

【退院後のご様子】

退院後はベッド上で過ごされ、発語もなく、少し手が動く状態でした。時々痰のからまりがあり、看護職による吸引が必要でした。

ご家族は仕事の合間をぬってはお本人に会いに足を運んでくださいました。

失語症の為、ご本人の意思はわかりませんがご家族が面会に来た時の笑顔、そして帰ってしまったときの悲しそうな表情から一緒に帰りたいという本人の意思を感じ取ることができました。

【ご家族の思い】

母が病院に入院しているときに家族やようさんの職員さんがお見舞いに来ると、母はとても良い笑顔をするんです。その姿を見て、早く退院させてあげたいと思いました。ただ、自分たちの生活もあるし子供達を育てなければいけません。母も大事だけど、やっぱり子供が一番です。ですが、仕事と子育ての合間に少しでも自分が住んでいた家を見せてあげたいし、帰らせてあげたいと思っています。できれば在宅で介護をしていきたいという気持ちはあるが、仕事、子育てもあるので、信頼できるようさんで面倒を見てもらいたい。そして穏やかに最期まで過ごしてもらいたいです。

退院後の様子やご家族の思いを踏まえて、ご自宅とようさんを行き来して生活していくための、ご家族とようさんの取り組みについて紹介させていただきます。

【A様が生活していく上での問題点と取り組みについて】

・喀痰吸引について

A様は嚥下に障害があるため、ご自宅やようさんで生活していく上で喀痰吸引が必要です。ようさんでは看護師が必要に応じて喀痰吸引を行っていますが、ご家族は喀痰吸引の経験がありません。そこで、A様が在宅で生活するためにご家族が喀痰吸引の研修を受講してくださいました。A様が初めてご自宅に帰った際には、看護師がご自宅に訪問し、ご家族に実際に吸引の様子を見ていただきました。そしてご家族がご自宅にて吸引を行う事が出来るようになりました。

・体調管理について

A様はご自分で体調の変化に気づき、ご家族や職員に訴えることができません。その為、日中は看護師がこまめにバイタルチェックを行い、夜間は夜勤者がバイタルチェックを行っています。何か異常があった場合の為に看護師の夜間電話対応者を毎日決め、すぐに連絡が取れる体制をとっています。また、褥瘡等の皮膚疾患の予防の為に体位交換を行っています。そしてご家族からの希望で訪問マッサージを利用し、拘縮予防を行っています。

・食事について

入院中、経口からの食事摂取は困難と判断され経鼻経管栄養となりました。経鼻経管栄養についてもご家族は経験がありません。そこで看護師がご家族にわかりやすく指導しました。退院して初めてご自宅に帰った際には看護師が訪問してご家族と一緒に経鼻経管栄養を実施しました。看護師が訪問することで少しでもご家族に安心して実施できるよう努めました。

・身体機能について

病院に入院中、ベッド上で寝たきりが長く続いた為、身体機能が著しく低下してしまいました。さらに車いすに座ると血圧の低下がみられ、最初のうちは5分も座っていることができませんでした。そこで毎日ご本人の体調を気にしながら、“5分でもいいから起こしていこう”と私たちチームで意見が合致しました。5分おきに血圧を測り、職員がそばにつき、なるべく話しかけるようにして座位保持訓練が始まりました。初めは表情も優れず、長くて10分が限界でした。

毎日続けていくうちに、笑顔が見られ簡単な質問に単語で答えていただけるようになり、車いすに座ってられる時間が20分、30分と日に日に伸びていき、いつもご家族との面会は居室でベッド上だったのがホールで面会できるようになりました。現在では1時間2時間、血圧の低下もなく座ってられるようになりました。その結果、シャワー浴ですが入浴もでき、自宅へ帰ることもでき、天気の良い日は散歩にも行くことが可能になりました。

・清潔保持について

退院当初は発熱や血圧の低下により入浴が行えず全身清拭を行っていましたが、座位保持が長時間可能になったことで週に2回入浴を行っています。その際、夜勤者による夜間帯の様子、バイタルなどを参考にし、看護師と連携しご本人に負担がかからないよう心がけています。他にも週2回歯科往診にて口腔ケア、場合に応じて理美容を行っています。

以上の取り組みを行うことで、A様とご家族の願いである“ご自宅とようざんを行き来した生活”の実現が可能になりました。また、ようざんでの取り組みを行うことや看護師がご自宅に訪問して指導するなど、ご家族への介護負担の軽減にもつながっていると思います。

【まとめ】

A様は入院中にご家族やようざんの職員がお見舞いに行くと笑顔が多くみられていました。A様ご自身は喋ることが出来ませんが、ご家族が感じたようにご自宅やようざんでの生活を望んでいたのかもしれませんが、今回の取り組みを行う事でA様ご自身とご家族のご希望である“ご自宅とようざんを行き来する生活”を実現することが出来ました。

これは喀痰吸引や経鼻経管栄養など、今まで経験したことのないことをご家族が熱心に行ってくれた賜物だと思います。

A様がようざんを利用されている時にご家族は頻繁に面会に来てくださいます。その時、A様はと

でも良い笑顔をされており、ご家族とお会いできるのが心の底から嬉しいのだと私達は感じております。

退院後は寝たきりで座っていることもままならなかったA様がここまで快復できたのは、A様のご家族に会いたいという強い気持ちと、ご家族のA様と一緒に暮らしていきたいという強い気持ちがあったからだと思います。

私たちは今後もA様とご家族と一緒に生活していけるように支援を行ってまいります。

「見えない」に負けない 明日へ続く光

～故郷へ想いをはせて～

ケアサポートセンターようざん中居 丸山 美由紀
近江 全子

【はじめに】

小規模多機能施設の大きな役割は、在宅生活を続ける為の支援です。
ご本人様が、長年暮らした自宅で安心して生活ができるようお手伝いをすることです。
今回、私たちは病気の悪化に伴い今までの生活が困難となった方の在宅復帰に寄り添った事例について発表いたします。

【ご利用者様紹介】

氏名 K様（要介護度3）

性別 男性

年齢 76歳

既往歴 高血圧 糖尿病 白内障(両眼) 脳梗塞(H29 10)

和歌山に生まれ、結婚し1女をもうけるも離婚。

17年ほど前に仕事の為 高崎に移住する。

昔から糖尿病であったがきちんと通院治療してこなかった。

4～5年前から白内障の為、両目の視力低下があったものの、なんとか自立生活を継続していたが、平成29年10月に脳梗塞を発症し高崎総合医療センターへ救急搬送される。

第一病院転院後、約3か月の加療、リハビリを経て退院となるが、入院中に白内障が悪化し、ほぼ両眼の視力が失われ独居での生活が困難な為、病院のソーシャルワーカーから相談がありようざん中居の利用が開始となる。

当初は白内障の手術で、だいぶ視力は回復するとの事で手術の予定さえたてば一か月ほどで以前のような生活に戻れるとの認識でした。

退院直後は、ようざんで宿泊対応をし、手術の予定や治療の計画を立てていく事になりました。

30年1月30日 高崎総合医療センターにて部分麻酔で行った白内障手術は、目が動いてしまい手術できず。予定を組みなおし、再度手術となります。

同病院にて2月20日 再度、白内障手術施行。手術時、眼中内の白い濁った部分は除去できたものの、取れた水晶体片が眼底に入ってしまう対応できないとの事で急遽 高崎総合医療センタ

一から、ようざん送迎にて群大病院へ向かい、同日20:30から落ちた水晶体片の除去とともに両眼の手術を行う事となります。

和歌山から娘様が付き添いのため来られていたのですが、一人では不安との事でスタッフも付き添い22時頃に無事手術が終了、術後の説明をうけるなど深夜近くまで家族に寄り添い対応致しました。

その後2～3日の入院を経て、2月23日に無事退院し、目の状態が落ちつくまでようざんで宿泊対応致しました。

一か月はゴーグル着用、1日5回の点眼の実施、手術も上手いきK様も一安心されたご様子でした。

以後、定期的に行く群大病院には、ご家族様が遠方である為スタッフが付き添い、丸1日かけての受診介助には、途中でフタッフを交代して対応しました。

K様も長い治療に根気強く取り組み頑張ってくださいました。(以下受診経過参照)

	病 院 名	受 診 時 間	経 過 内 容
30年 3月23日	群大病院 受診	10:00～20:30	経過良好
4月19日	群大病院 受診	14:00～19:15	経過良好
5月22日	高崎総合医療センター 受診	10:30～12:00	経過良好 自宅近くの眼科に移行する

並行して在宅生活復帰に向け ご本人様がいつも過ごしていた居間にベットを移動し自宅の環境を整えつつ、まず1～2時間の日中帰宅を始めました。

自宅に戻る時には 1日5回訪問して点眼を行いようやく通いと在宅での支援が始まりました。

ところが、一か月後の6月19日の眼科受診時に精密検査が必要と言われ、群大病院を受診した結果、右目網膜剥離の為手術が必要と言われ、6月28日、29日と2日にかけて再受診し、右目の手術の日程と、新たに左目のレーザー治療の予定を組みました。

7月3日 全身麻酔で右目の網膜剥離の手術施行、手術中はスタッフが付き添いを行いました。

(以下受診経過参照)

	病 院 名	受 診 時 間	経 過 内 容
30年			
6月28日	群大病院 受診	8:30~15:00	検査の為 受診
6月29日	群大病院 受診	9:00~15:00	検査の為 受診
7月 2日	群大病院 入院	7:40~11:00	入院送迎
7月 3日	群大病院 手術	8:00~12:30	全身麻酔にて右目網膜剥離 手術実施。 スタッフ付き添い
7月 8日	群大病院 退院	11:00~12:30	退院送迎

7月8日に無事退院となり、再び在宅に向けK様と一緒に通院治療が始まりました。

(以下受診経過参照)

	病 院 名	受 診 時 間	経 過 内 容
30年			
7月13日	群大病院 受診	9:00~14:00	経過良好。抜糸をおこない視力は徐々に回復。
7月18日	群大病院 受診	13:00~17:00	経過良好。
8月 3日	群大病院 受診	13:00~17:00	目に水が溜まっているが、様子を見ることとなる。
8月17日	群大病院 受診	13:00~17:00	経過良好
9月14日	群大病院 受診	10:00~16:00	網膜剥離 完治次回の受診で自宅近くの眼科受診に切り替える事となる。目薬も使いきりで終了。
10月26日	群大病院 受診	10:00~17:00	本日にて終了予定であったが、左目のレーザー治療を忘れていたとのことで、受診継続となる。

	病院名	受診時間	経過内容
30年 11月 1日	群大病院 受診	14:00~18:00	左眼のレーザー治療
11月 9日	群大病院 受診	15:00~18:30	左眼のレーザー治療
11月15日	群大病院 受診	14:00~18:30	左眼のレーザー治療

11月15日の治療を最後に群大病院受診が終了し、自宅近くの眼科受診へ移行となり、経過観察と点眼の継続で状態が安定してきました。

一か月の予定であった治療が、結果 約1年かかり、3つの病院で検査、通院、手術を行いようやくK様も安心して自宅で生活できるレベルの視力まで回復しました。

白内障の治療にもやっとめどが付き、家族がいる和歌山へ帰りたいたいという言葉が聞かれるようになり、私たちスタッフ一同もみなそうなれたらいいなと思っていました。

ところが、K様に高カリウム血症のリスクが発症したのです。

血液検査のカリウムの値が少しずつ悪化し、平成31年2月には6.1mEq/Lの値が出てしまいました。

そして医師から「このままじゃ入院になるよ」「いつ、心臓が止まってもおかしくないんだからね」との言葉があり、帰郷に前向きになっていたK様には本当に残酷な言葉でした。

改めて、スタッフ一丸となりK様と数値改善に取り組んだ結果、4月の検査ではカリウム値 5.7 mEq/L、6月には 5.1mEq/Lと改善することができました。

配食センター ぽからの本多所長にも、1食分のカリウム値を計算して頂くなどご協力を頂き、お忙しい中、本当にありがとうございました。

もうしばらく、食事療法を継続しカリウム値を下げ、体力をつけてご家族様の待つ故郷に帰れる日をめざして行きたいと思います。

【終わりに】

今回、私たちは一年に渡る白内障の治療に寄り添い、K様が安心して在宅で生活できるレベルまで視力を回復する事ができました。まだ問題は続いています、K様の思いである「故郷へ帰る」を目指してこれからも取り組んで参りたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

「 バリデーショから学ぶ介護の原点 」

～寄り添うことの大切さ～

スーパーデイようざん石原

発表者：手島圭子

<はじめに>

「おはようございます！」と職員が出迎えても、無表情で発語もありません。その後の話しかけにも反応は無く、お茶や食事にも口を付けず、反応があるとすれば入浴や排泄介助時の「殺せばいいだろう！」などの暴言と叩く、つねる、引っ搔くの暴力、床に寝そべり手足をバタつかせたり介護抵抗や床や壁に頭を打ち付ける自傷行為と言った言動です。

つい半年前までは、笑顔で来苑され帰宅時にも笑顔で「今度いつ来るんかねえ？」と必ず確認をされ、ご家族からも「ようざんに行くのを楽しみにしているんですよ」とのお話もありました。それが急激とも思えるその変わりように「どうしたんだろう？！」と職員一同驚き、正直不安と戸惑いを隠せませんでした。が、バリデーショを実践することで少しずつではありますが、変化が表れた事例を紹介します。

<利用者紹介>

氏名：A様

性別：女性

年齢：89歳

介護度：要介護3

既往歴：アルツハイマー型認知症、糖尿病、高血圧症

<生活歴及び利用の経緯>

8人兄弟の次女として生まれ、幼い頃から4人の弟の面倒を見ながら親を助け、弱音を吐くことも無く頑張って来られました。弟さん達からは「気が強い」「うるさい」「怖い」と言われながらも良き姉として慕われ、頭が上がらない存在でした。

結婚して子供が生まれてからご主人と印刷業を営み、A様は製本などを受け持ち夫婦二人三脚で支え合って、子育て・家事・仕事をこなして来られました。

現在は息子さんが後を継がれていますが、今でもテーブルの上の物が曲がっていると真っ直ぐに直されたり、カードや歌集をきちんと揃えられる動作から、当時の仕事ぶりがうかがい知れます。53歳の時にご主人が他界されてからは、それまで以上に独りで寝る間も惜しんで仕事に励まれました。そんな中でも唯一おしゃれを楽しまれ、今でもダンスの中は好みの洋服でいっぱいだそうです。

性格は短気で、気に入らないと文句を言ったり、やりたくない事には「好きにすれば良いだろ

う！」と開き直ることがあったりしても、困ったときには黙っていても必ず助けてくれる情の深い面も多々あったそうです。

平成26年頃から、元々近所付き合いや外出も乏しかったところに更に引きこもり状態となり、日に何度も同じことを言ったり聞いたりする様にご家族も困惑され、生活状態を改善して健康的な生活を送って欲しいと言う思いから、同年9月から利用開始となりました。

<利用当初の様子と変化>

あまり社交的では無かったことからご家族も利用できるか心配をされていましたが、体験利用時から各種レクに熱心に参加をされ、他者との交流も良好でした。継続利用となってからも、職員の顔を覗き込んで「あんた良い顔してるねえ」とお道化られたり、慰問の際は、最前列で童心に帰られたようにノリノリで喜ばれていました。いつも笑顔で来苑され帰宅時にも「今度いつ来るんかねえ？」と聞かれ、職員の答えを聞いてから上機嫌で帰られていました。

変化が出始めたのは、去年の秋頃からでした。徐々に無表情、意欲低下、声掛けにも無反応で自らの発語も少なくなっていました。あんなに喜ばれていた慰問の際も最後列で職員の手を握り締めて、この時ばかりは「ここにいてくれる？」「あっちの部屋に帰れるんかね？」と子供が不安そうな表情で訴えられるようになる一方で、排泄や入浴介助に対して床に寝ころび、駄々っ子のように手足をバタつかせながら「殺せばいいだろう！」と大声や奇声を発したり、叩く・つねる・引っ掻くの暴力や、人の気を引くためにわざと床や壁に頭を打ち付けると言った自傷行為が頻回となりました。

食事や水分も毎回自力で全量摂取されていたのが、配膳しても押し退けたり手で払い退けたりで、未摂取の日があったり、自力では食べないものの声掛けをしながらの介助で、何とか8割程食べられました。

同じ頃ご家族からも…

- ・認知症が進んで、いろいろなことが理解できなくなって大変
- ・暴力もあつたりするので大変
- ・仕事や年頃の娘のこともあり、なかなか相手をしたり世話をするのが難しい
- ・下の処理が上手く出来なくなって大変

とのお話があり、定期受診の際に主治医にも相談をして薬が処方されましたが、目に見えた変化はありません。

<取り組み>

「原因は、いったい何だろう？」と悩みました。唯一思い当たるのがショートステイの利用でした。利用開始当初は一泊二日を月に1回程度だったのが、ご家庭の事情で二泊三日を月2～3回と徐々に増え、現在は三泊四日を月4回となっており、これに伴って症状の変化も見られるようになったことから、環境・生活・人間関係の変化による混乱や不安と家に帰れない寂しさなどによるストレスに困って、子供帰りしているのではないかと推察しました。そこから不安や寂しさ

を軽減するには、介護の原点であるバリデーションが効果的ではと考え実践することにしました。

まず、職員全員が同じ対応ができる様に

・寄り添いながら

- ① ミラーリング
- ② アイコンタクト
- ③ タッチングやタクティール
- ④ 童謡や唱歌などの音楽を活用
- ⑤ はっきりとした低い温かみのある声で話しかける

の5項目を周知し、来苑時、レクリエーション時、トイレ誘導時、入浴時、昼食時、帰宅時に必ずどれかを実践して、その時の状態変化(表情・発語・行動・態度)を記録して情報共有することになりました。

<結果と現在の様子>

実践を始めると…

- ・背中をさすりながら唄うと、つぶやきのような声でも一緒に唄われる。
- ・童謡をゆっくり優しい声で唄うと、今まで一度もウトウトされたことが無かったのがウトウトとされる。
- ・手を包み込み「手が冷たいから温めましょうね」の声掛けに「うん」と頷かれる。
- ・食事介助中に目を見て、温かみのある声で「美味しいですか？」と聞くと「美味しい」とつぶやかれ、久しぶりに全量摂取される。

などの変化が見られましたが、もちろんこんなことが毎回見られる訳は無く、日によっては変わらず、感情を爆発される事ももちろんあります。それでもめげず、逃げず、諦めず、根気強く正面から向き合い続けました。

ある日のことレクリエーションで、以前良くやっていた数字パズルを始めた時のことです。いつも通りバリデーションを行いながら、職員が「これは、ここですね」「そうそう。そうですね」と誘導すると「ああ、ここかい」「これは、ここだね」と指さしをしたり、会話をしながら協力して1～55までを全て並べきりました。そこには、以前のA様が居るではありませんか！「おお！」と感激と嬉しさのあまり、ついウルウルしてしまい思わず「バンザイ！」と言うと、A様も嬉しそうに笑って下さいました。

その後も…

- ・職員が横に座って冗談を言いながらタッチングすると、笑いながらタッチングを返してくれる。
- ・職員が変顔をすると、何度も声を出して笑われる。
- ・食事は介助することが多かったのが、自力で残さず食べられるようになる。
- ・「今日は、ピンクの素敵な服ですね」と称賛すると「そうかねー。皆だって可愛いよ」と返して下さる等々、表情も発語も増えて、少しずつではあっても以前のA様に戻ら

れているのが感じられます。

また今回の取り組みは、職員にも変化をもたらしました。

- ・職員も焦ったり戸惑うばかりで無く、一呼吸して気持ちを落ち着かせることができるようになった。
- ・A様の表情に近づけたり、視線を合わせることで、言葉が少なくてもお互いの感情が伝わりやすくなった。

と言う感想や意見が出るようになったことは、職員の成長にも繋がりました。

<まとめ:考察>

認知症の人にとって“変化”は無いのが理想であっても、現実的ではありません。

今回のA様についても、一緒に暮らすご家族の諸事情でショートステイをご利用することは、やむをえないことでした。

反省すべきは私達職員が、そういった変化に伴いご本人にも何かしらの変化が出るであろうことを事前に予測し、対応策を考えておらず後手に回ってしまったことです。

幸いそれでも変化の時期と要因を照らし合わせ原因を推察し、併せてご本人の変化の状態を観察し、逃げず、否定せず、ありのままを受け止め受け入れ、介護の原点でもあるバリデーションを実践することで、子供帰りと言う一種の現実逃避の状態から少しずつ以前の状態に戻れつつあります。

時間を要し、それでももしかすると完全には行かないかも知れませんが、また笑顔で「今度いつ来るんかねえ？」と手を振られることを信じて、現在も取り組んでいます。

「特別」じゃない「当たり前」のこと。

ケアサポートセンターようざん双葉

発表者：小野塚 聖鷹

【はじめに】

歳を重ね、徐々に若い頃のように自由に体を動かすことが出来なくなり、更に認知症を患っても、人は「やりたいこと」「食べたいもの」「会いたい人」「行きたい場所」色んな欲求を持って生活しています。それらの欲求は、これまで当たり前だったことが、次第に加齢や疾病により「特別な事」になっていきます。しかし、一人ではできないことも、支援する事でその望みを実現する事はいくらでもできます。つまり、周りの環境次第で「特別な事」ではなく今まで通り「当たり前」のようにやりたいことができる環境を創ることが出来ます。今回の事例を通じ、「特別な事」として諦めていたことは、支援の環境次第で諦める事ではなくなり、次第に日常生活に「当たり前」の事になっていくと、私たち自身改めて気づくことが出来た事例について報告させていただきます。

【利用者様紹介】

A様 男性 78歳

要介護3 認知症高齢者日常生活自立度Ⅲb

長谷川式簡易知能スケール：15点

既往歴：認知症・慢性閉塞性肺疾患・右上腕近位端骨折術後

3人兄弟の長男として東京でお生まれになる。

その後、本庄で庭師として弟子を指導しながら生計を立てる。

結婚し息子と3人で生活していたが、病により妻が他界。

現在は高崎で生活保護を受けながら独居での生活を送っており、家族とも疎遠状態となっている。

【経緯】

ご本人は慢性閉塞性肺疾患(COPD)を患っており、呼吸苦を感じると日常的に昼夜問わず救急車を呼び、繰り返しA病院へ搬送されていました。多い時は1日に5回呼んでしまう事も。症状により入院になる事もありましたが、家に帰りたくなると「今日帰る！」と言い強引に退院されるような状況が続いていました。退院して、数時間後に救急車で病院へ戻ることもありました。

そんな中、相談員さんより介護サービスの相談を受け、4月より小規模多機能と訪問看護のプランによる支援が開始されました。

【支援開始】

アセスメントや担当者会議を通じ、自分で決めた事は曲げず、周りの意見に耳を貸さないという印象があり「果たしてサービスの利用が出来るのか？」という不安だらけでのスタートでしたが、案の定訪問しても留守でお会いする事が全くできない状況が続きました。ようやく電話で話が出来ても、

「今日は来なくていい！」と一切サービスの受け入れが出来ない日々が続きました。このままではご本人の支援が出来ない。何とかできないかと、信頼関係構築の為のきっかけを模索する日々が続きました。しかし、私たちが抱えていた悩みはなんとあつけない形で解決されました。

【些細なきっかけ】

ある日病院より、「また救急車で本人がこちらに見えています。治療が終わりこれからタクシーで帰ろうとしています。無理を承知の連絡ですが、これからお迎えに来ることはできますか？」との連絡が入りました。なんとか調整し病院へ向かうと、これまで一切心を開かなかったご本人が車の中で「ありがとう！いや～助かるよ！タクシーだと片道3000円だからな～！こんな親切な人がいるんだな。申し訳ない！」とご自宅まで送る車中、感謝の言葉が絶えず、今までとは別人のように言葉をかけてくださいました。この日を機に、徐々に訪問の支援が入れるようになりました。これまで呼吸苦を感じると救急車を呼んでいましたが、徐々にご自身で訪問看護へ連絡するようになり、プラン通り定期訪問の他、緊急時の訪問に入り頓服薬の対応が出来る頻度も増えてきました。病院の相談員さんからも、介護サービスが入るようになり救急車で来院される頻度が減少しているのを実感していますとの連絡も受けました。

【特別な場所】

ご本人は、少しずつご自身の事を私たちにお話し下さるようになりました。これまでの生い立ちの事に加え、今現在ご本人が「やりたい事」「行きたい場所」「食べたいもの」様々な事を話してくださいました。その中で、「うちの近くに『なみき』という喫茶店があって、あそこのコーヒーは高崎で一番うまいんだよ！俺はこんな体だからもう飲みたくても飲みに行けないけど、近くを通った時には寄って飲んでみる。うまいぞ！」と教えてくださいました。元気な頃は当たり前のように通っていた喫茶店、しかし現在は本人にとって当たり前のように行ける場所ではなく「特別な場所」になっていました。ご本人からの話を受け、「今度一緒に行きましょうよ！」という、驚いたように「お宅はそんなことまでしてくれるんか！ありがとう！もう行けね～って諦めてたんだよ」と話されました。

【「特別な事」から「当たり前」に】

喫茶店に行く日時を決め、いざ迎えた当日。お約束した日は生憎の今年一番の大雨。「残念だけど延期かな」と思いつつ、確認の電話を入れてみると、「何言ってんだよ！待ってるんだから来てくれよ！」と大雨を一切気にしておらず、久々に飲むコーヒーをタベから楽しみにしていたと話される。10時過ぎに喫茶店に到着。ご本人は迷わずモーニングセットを頼まれました。ご本人に伺うと、よく通ってた頃は決まってモーニングセットを頼んでいたとの事。「懐かしいなー。

相変わらずうめ～な～」と昔を懐かしむようにトーストやコーヒーを召し上がられていました。するとご本人は「昔は色んなとこに行けて、いろんなことが出来て・・・でも年取ってこんな身体で、忘れっぽくなっちゃって・・・まあしょうがねえよな～。歳とるつつうのはそういう事だもんな」と、今のご自身の素直な気持ちを話してくださいました。そんなご本人に、「定期的に行きましょうよ」と提案しました。

今回だけでなく、定期的に継続する事で「喫茶店でモーニングを食べてコーヒーを飲む」事が徐々に日常生活において、特別な事では無くなっていく事が期待できます。

【考察】

介護サービスが関わるようになり、服薬状況が改善し、救急要請が減り、少しずつ状態が安定した結果、行きたかった喫茶店行くことが出来ました。

当初、「そもそも介護サービスを利用できるのか？」という不安からのスタートでしたが、この様に一つの結果を残せた事に、小さな自信と、素直に「良かった」という気持ちと、「この方はもっといろんな事が出来るはず」という確信をもちました。

【おわりに】

こんな体じゃ・・・認知症だから・・・そんな理由で目の前に広がる「楽しみ」を諦めなければいけないのでしょうか。確かに一人では難しい事もあります。加齢やご病気を理由に色んなことを諦めていたご本人。これまでは諦めざるを得なかったのかもしれませんが。

しかし、私達「介護サービス」が関わるようになり、服薬状況が改善し、救急要請が減り、少しずつ状態が安定した結果、行きたかった喫茶店に行くことが出来ました。

今後も丁寧に関係作りを継続し、医療・介護サービス間で情報共有を図りながらチームで在宅支援を行い、これまで「特別な事」として諦めていたことを、一つでも多く「当たり前」にできる生活を目指していきたいと考えています。

これまで諦めていたことは、支援の環境を整える事でいくらかでも実現する可能性は広がります。それは継続していくことで「特別な事」から次第に「当たり前」の事へと変化していきます。

これまで諦めていたこと、私たちと一緒に「当たり前」にいきましょう。

『認知症介護に一生懸命です！！』

～心に響くケアを目指して～

デイサービスようざん並榎
行方 博之

【はじめに】

本事例を発表するきっかけとなったのが今年の1月に祖母が他界したことでした。祖母は8年前にアルツハイマー型認知症と診断されデイサービスを利用開始しました。3年前頃から認知症状が悪化しはじめて徘徊が始まり警察に保護されることが多くなりました。その他にも頻回なトイレ、それに伴う転倒や介護抵抗など介護負担が増加し、キーパーソンの1人である母も当時はネガティブな発言が増え始め悩む姿が多くありました。そんな祖母ですが、大好きで夢中になれるものが編み物でした。デイサービスにいる時間だけでなく自宅に帰った後も夢中で編んでいました。それらは今でも我が家の家宝として使っていて、時々母も懐かしんで祖母の思い出を語っています。そんな心に残る作品や心に響くケアを自分の事業所で取り組みたいと思ったのが発端でした。認知症ケアは総合的な支援が必要で認知症の利用者への対応は勿論のこと、その家族のケア、地域との関わりが必要となってきます。今回は「心」をテーマとして認知症利用者・家族・地域のすべてに真摯に取り組んだ事例を報告致します。

テーマ1【他者との関わりを軸とした認知症利用者の心のケア】

<対象者紹介>

氏名:A様	氏名:B様
性別:女性	性別:女性
年齢:89歳	年齢:95歳
既往歴:アルツハイマー型認知症 高血圧症、慢性硬膜血腫	既往歴:アルツハイマー型認知症 本能性高血圧
性格:明るい、涙もろい	性格:穏和、頑固
趣味:グランドゴルフ、散歩、歌	趣味:気の合う方と会話、昔話
生活歴:埼玉県出身、夫と2人暮らし 洋裁を習っていた キリンビール工場に勤務	生活歴:独居 和裁を習っていた キリンビール工場に勤務

<利用当初の2人の様子>

A様は「私はしっかりしているからここにいる人とは違う!」「家で用事があるから帰るよ!」と帰宅願望が利用当初より多く出ていました。対するB様は「私は話が好きなのにいじわるする人がいる・・・」と隅の席に座り1人でぼんやり過ごす時間が多く、利用数回目には「友達と約束しているか

ら今日は休みます」と来所拒否の電話がありました。2人に共通していたのが「居心地の良い環境ではない」ということでした。

厚生労働省のホームページには認知症ケアの基本的考え方が掲載されています。その中から「心のケア」と「関係性の重視」に注目しました。2人の好きな事・得意な事をケアに取り入れ、また、2人の共通点から交流する機会を作り馴染みの人間関係の構築を試みました。

A様、B様への取り組み1 『思い出アルバムの作成』

2人が同じ麒麟ビール工場に勤めていて裁縫の経験があるとの情報から当時の麒麟ビール工場関連の写真や裁縫道具の写真など2人の共通の思い出写真を集めたアルバムを作成しました。また、それだけでなく個々の思い出の写真と本物の麒麟ビールの空き瓶も用意しました。

A様、B様への取り組み2 『趣向に沿ったレクリエーション』

A様の好きな歌と得意なグランドゴルフをイベントにしてレクリエーションに取り入れました。その際B様が近くにおいて一緒に楽しみを共有できるようにも工夫しました。

《認知症利用者への心のケア 考察》

○思い出アルバムのねらい

- ①回想法による効果の期待
- ②共通の話題を提供して2人の人間関係構築のキッカケを作る

○イベント系レクリエーションのねらい

- ①認知症利用者が輝けるレクリエーションの実施
- ②2人が楽しみを共感すること。また、他の利用者の輪に入りやすい環境をつくる

結果 A様もB様も思い出アルバムを見ると2人ともパッと表情が明るくなり「懐かしい！」「ここで一緒に働いていたよね！」と当時を思い出しながら話が盛り上がっていました。イベント系レクリエーションではA様は集団の中でいざ自分の番になると「恥ずかしいよ～」と照れながらも懐かしの歌を熱唱、グランドゴルフでは準優勝に輝き高らかな笑い声がホール内に響いていました。またイベント中、孤立しがちなB様に対してA様が隣から語りかける姿も多くあり、2人の交流も図れていました。他にもA様は得意分野で活躍したことにより他利用者から称賛されB様以外の気の合う方も出来ました。対するB様もアルバムを見て昔話を嬉しそうに語り安堵する表情が増えるなど予想以上の効果が出ました。

《課題》一部の利用者から帰宅願望などの認知症状が出るA様が主役になって目立つことや、職員が2人に多く関わる事に対して不満そうな発言が時々出ていました。周りの利用者の認知症への理解をどう深めていくか？が今後の課題です。

テーマ2【家族の想いと地域の支え合う心を大切に】

家族への取り組み 『ポジティブ思考の推進』

利用者様が認知・身体ともに重介護にも関わらず、ご家族様はいつも前向きに笑顔で接して下さる方がおります。ご家族様の辛い事、悩んでいる事を聞くことは今まで多かったです、今回は視点を変えて逆にポジティブに考えられる出来事は何か？一部のご家族様にアンケートをとったところ、快い協力のもと速やかにお返事がきました。

「家族の声」

- ・言葉少ない母なので、時折見せる笑顔を見ると嬉しくなります。
- ・若い時はよくカメラ、写真を撮ってくれた。
- ・デイサービスを嫌がらずに行ってくれてありがたい。自分の時間が持てて習い事も出来るようになった。その分帰ってきたら優しくなれる。
- ・白髪染めをしてあげると「ありがとう」といつもすごく喜んでくれる。
- ・前向きになれることは「1人ではない」と思う事です。

これらの貴重な言葉を1人でも多くの方に伝えて共有したいと考え、ようさん通信に掲載し、廊下にもコーナーを作り展示しました。また、ポジティブ関連の書籍を数冊揃え、現利用者の家族にポジティブ思考例のお知らせを出すとともにそれらの本の貸し出しも始めました。

地域への取り組み 『利用者作品展の開催』

日頃、認知症の方を含め手先が器用な方と一緒に作って溜まった作品を集めて、5月に開催したオレンジカフェで「利用者作品展」と称して展示会を開きました。そこでは訪れた地域住民の方に「ありがとうレター」という感謝の手紙を書いて下さった方に一部の作品を譲与する形を整えました。すると「手先が器用ですね。次回の作品も楽しみです！」「とてもかわいいです！子供にあげたいと思います。」などのたくさんの手紙が集まりました。民生委員さんの快い協力もあって、利用者代表としてB様に手紙をまとめて授与して頂く事が出来ました。後日、作品を作って下さった利用者の皆様個々に私達職員の感謝の手紙も添えてお渡ししました。

《家族・地域へのケア 考察》

○ポジティブ思考推進のねらい

- ①聞き取りアンケートにより家族の隠れた想いを引き出す
- ②家族が利用者の良い点を振り返りポジティブ思考でストレス軽減

- ③職員の家族への対応力強化
- ④ようざん通信や事業所内掲示物の有効活用

結果 ご家族様から「前向きになれるわけがない」というネガティブな返答も覚悟していた中、心打たれる被介護者への想いや在宅介護への意識の高さなどがたくさん出てきて驚きました。それとともに今まで家族の心の声を把握出来ておらず活かしきれていなかったことを痛感しました。私達よりも長い時間利用者に寄り添い、誰よりも利用者のことを理解しているご家族。その貴重な声を同じ在宅介護で悩む方たちへ届けることも私達がすべきケアだと改めて感じ取ることが出来ました。

○利用者作品展のねらい

- ①認知症利用者の「役割支援」「生きがい作り」
- ②地域に再び訪れたい企画を作り「認知症」への理解・関心を深める
- ③職員の地域への対応力を強化する

結果 一緒に作った利用者の方は、出来上がった作品を見るとやりがいや達成感を感じていました。また真剣に作ることで集中力の効果にも繋がりました。外部に出掛ける際、作品を幾つか持っていき「誰が作ったの？私も欲しい！」と関心を持たれる方も多く、そのことを利用者の方に伝えると「嬉しいね～。いつでも作ってあげるよ！」と張り合いが生まれ、良い相乗効果を生み出しながら地域に広がっています。他にも感謝の手紙を受け取ると「こんな私なんかが役にたったの？」と感激して涙を流す方もいらっしゃいました。自宅に帰ると嬉しそうに感謝の手紙を家族に見せて「役に立っているね～」と褒められたそうです。認知症利用者だけでなく家族の心にも残るケアの実践に結び付きました。

《課題》利用者へのケアが最優先とされる中、家族・地域に対して利用者と同等のケアは難しいのが現状です。限られた時間・人員で利用者へのケアの質を落とさずに家族・地域へのケアに取り組むプログラムをどう作るか？が課題です。

【まとめ】

「どうしたら認知症の利用者の方の心に残るような思い出を作れるのだろうか？」「どうしたら家族がポジティブな気持ちになれるのだろうか？」「どうしたら地域に認知症への関心を深められるのだろうか？」と様々な観点から心に響くケアを考えました。その結果が思い出アルバムをキラキラした目で眺めるB様や、新たな交流を図って高らかに笑っているA様の笑顔に繋がっているのだと思います。

今回の取り組みで「第一に相手の想いに向き合う」という基本を振り返る

ことが出来ました。日々のケアを行う際に「このケアはどんな想いに繋げる 事が出来るのだろうか？」と考えるようになりました。また、職員一丸と
なって取り組むことで連携も図れて大いにチームワークを発揮出来ました。
チームプレイの重要性を肌で感じ、「私もこのチームと一緒に頑張りたい！」
と心から思いました。

やはり真剣に取り組む姿勢が人の心を動かすのではないかと思います。
時々日々のケアの中で事業所の都合を優先に考えてしまいそうになりハッ
とします。これからも相手の想いを第一に考えて「心のケア」を優先して
職員一丸となって「介護に一生懸命」頑張っていきたいと思います。

私に仕事をください

ショートステイようざん

発表者: 福元俊仁

【はじめに】

A様は、ショートステイようざんを利用している利用者様ですが、A様の中では、パートとして働きに来ていることになっています。子育て中も子育て後も毎日仕事をしていたA様はとても働き者です。利用中は毎日「仕事をください。暇にしているのが嫌なの。」とおっしゃるので、食器洗いや洗濯物干しなど職員の業務を手伝ってもらいました。業務の仕事がなくなると、「やらなきゃいけないことがあるから、仕事がないなら帰りたいんだけど・・・」と訴えます。ある日なんの変哲もない会話のなかで、職員が「Aさんは良く働くので、パートから正社員になってもらった方が助かります。」と言うと「いやー、私80ばあさんだから。」と拒みつつ、嬉しそうに笑顔を見せてくださいます。「正社員になればお給料も上がりますよ。」と言うと、とっても嬉しそうな笑顔を見せてくださいます。そこで私たちは、お金を得る喜びはいくつになっても嬉しいものだと仮定し、収入の発生しない『お手伝い』ではなく、実際に収入の発生する『仕事』をして頂くことができないかと考えました。

ショートに入所されるということは制限された社会に生きることになります。しかし収入を得るためには自由な社会と関わりを持ち、その中の他者と関わっていく必要があります。ショートに入所されても自由な社会とつながりを持ちながら、その中で生きがいを見出し、自分らしく生きていけるという事例を発表させていただきます。

【事例発表対象者】

氏名:A様

年齢:79歳 女性

要介護度 3

既往歴:アルツハイマー型認知症

腎臓病

左大腿骨頸部骨折

生活歴:A市の梅農家の娘として育つ。高校卒業後は洋裁学校へ入学。

結婚しB町へ嫁ぐ。結婚後も電気関係の企業等にパート勤務され家計を支えていた。その後も農家をしながら内職で洋服のお直しの仕事をされる。

13年前に夫が他界。4年前に息子さんが他界。その1年後くらいから、会話のなかに事実と違う内容などが目立つようになる。熱中症により受診したことをきっかけに

脳の検査を受け、脳の萎縮が認められる。

利用に至った経緯:平成30年12月、自宅の石段から転落し、救急車で病院へ搬送され、左大腿骨頸部骨折と診断される。人工骨頭挿入術を施行後、リハビリを行い歩行可能になる。入

院中は、手術後であることへの理解が十分できないことから一人で動こうとされることが多々あり、拘束を余儀なくされる状況もあった。また退院願望も強く、病院の看護師やご家族に対し「もう元気なんだから帰らせて」と訴えがあった。ご家族と主治医と話合いの結果、短期入所生活介護への入所となる。

【取り組みとねらい】

1 制作過程

まず初めに、収入を得る方法を考えました。普段の会話で、「お直しの仕事をしてるの。デパートから沢山くるから、休んでる暇なんかないのよ。」とA様はよくお話しして下さいます。裁縫やパッチワークなど細かいことが得意なA様。それを活かして、パッチワークの香り袋を作り、それを販売することで対価をもらい、生活への意欲をもっと高めてほしいと考えました。

A様のご家族に取り組みのことをお話すると快く承諾して下さい、必要なものを一緒に買いに行きました。A様の好みの布を選んだり、何が必要なのか一緒に考えて探したりしている時の表情は、ショートステイの業務を手伝って下さっているとき以上にいきいきとされていました。もしこれが形になり、買って下さる方がいて、対価を得ることができたらA様の生きがいになるのではないかという期待が職員の中で膨らみました。

そして、A様の毎日の日課の中に、「内職の時間」が加わりました。職員と「頑張りましょう」と励まし合いながら仕事をされます。A様は、生活動作のADLはほとんど自立されていますが、認知症を患っています。そのため、手順がわからなくなったり、何を作っているのか途中で忘れてしまったりするので、職員が近くで見守るサポートが必要です。しかし針を持って細かく丁寧に縫い合わせいく手つきは素晴らしく、認知症を患っているとは思えない手際の良さです。そして何より、真剣な表情と自信にあふれた笑顔がとても私たちの心を打ちました。いつも「帰らなきゃ、嫁さんに電話してくれる？」と不安そうにしているA様とは別の方のようです。

出来上がった香り袋を、購入していただけるようにきれいにラッピングしました。A様は、ラッピングされた香り袋をみても、ご自分で作ったこと自体を忘れてしまっているようでした。「これ私が作ったの？ そうだっけ？」というお言葉に、すこし寂しさを感じます。しかし、認知症によりたとえ自分が頑張ったこと自体を忘れてしまったとしても、制作しているときのいきいきとした自信に満ちた表情に代わりはありません。「これ、一緒に作ったんですよ。これから地域の方に紹介して、欲しい方がいたら購入してもらえるようにしましょうね。」とお話すると、A様らしく控えめな照れ笑いをされます。

2.地域の方たちへの紹介

A様が作った香り袋をみなさんに紹介できる場として、オレンジカフェやいきいきサロン、地域のバザーなどを活用しました。また、ショートステイようぎんの玄関にもブースを作り、ご利用者様のご家族様や、ケアマネジャーさん、業者さんなどにも幅広く紹介をさせていただきました。利用者様の得意なことを活かした活動内容に共感してくださる方が買って下さり、A様は、実際に内職し

た対価を手にすることができました。

【結果】

売上金をお渡しすると、A様らしく控えめに、でもとてもうれしそうに笑顔を見せて下さいました。A様は、香り袋を作っていることは忘れてしまいます。お金は、毎月のお給料だと受け止めていらっしやるようでした。「Aさんの作って下さった香り袋を買ってくれたひとがいっぱいいるんですよ。」とお伝えしても、「仕事でやってるんだから、お金なんかいいの。」と言われる。私は、頑張った対価としてお金がもらえることが喜びや生きがいになるのではないかと思っていましたが、A様にとっては、仕事をする事自体に喜びを感じていらっしやるようでした。

A様はその後、日課として内職をされています。もちろん、ショートステイの業務も頑張って下さっていて、私達はA様を同じ職員の仲間として関わらせていただいております。以前パートさんでしたが正社員になったことをA様も喜んでいらっしやいます。強い帰宅欲求は穏やかになり、最近はとても笑顔が増えました。

【考察・まとめ】

利用者様が手持無沙汰になると帰宅願望や不穏になられる場合があると思います。やることがないということは誰からも必要とされていないと感じて、自信がなくなり、不安や不穏、必要としてくれる人がいる家に帰りたくなくなり、帰宅願望になってしまうのではないのでしょうか。仕事があるということは、他者から認められているということです。認められない世界にいたら誰も不安に駆られるのではないのでしょうか。

認知症だからと諦めて何もできない。何もさせない。ではなく、認知症になってもこんなことが出来る。世の中の役に立てるということを知って頂けたら嬉しいです。と同時に認知症を患ったからこそ、人から頼りにされればその人は安心し、自信を持って日常生活を送って行けるのではないのでしょうか。私は認知症介護に携わるものとして利用者様に「あなたは必要な存在で、みんなから頼りにされているんだよ。」ということを伝えていきたいと感じました。

「きーちゃん」と共に生きる

特別養護老人ホームアンダンテ

発表者:木戸 恒汰

:中嶋 春樹

【はじめに】

大正一桁の生まれで、アンダンテ最高齢のA様は、丸まった背中に幼くして亡くなった長女の「きーちゃん」を背負い、「きーちゃん」に食事を食べさせようとして自分では摂らず、背中に腕を回して「ほら、お食べ」と口にいれてあげようとする。

このA様にしか見えない「きーちゃん」を、職員全員が存在を認め、子供の世話をしたいという母親の温かな思いに寄り添った事例を発表します。

【事例対象者紹介】

氏名:A様

年齢:99歳

性別:女性

要介護度:4

既往歴:認知症、難聴、下肢廃用症候群、誤嚥性肺炎

障害者高齢者日常生活自立度 C1

認知症高齢者日常高齢者日常生活自立度 IV

【生活歴】

高崎市内生まれ、八幡町の農家のご主人のもとに嫁ぎ、長男、長女に恵まれる。

野菜作りやお蚕を育て生活を支えてきた。

お嫁さんに伺った話では、「喧嘩は一度もしたことがなく、出かけたときも行っといでと、送り出してくれた優しい人」と話して下さる。

【本人の様子】

「きーちゃん」に対する思いが強く、心配のあまり食事や水分を全く摂らないことがあり、明らかに食事量や水分量が減ってきている。

また子供のことが気がかりで職員や他入居者に「子どもと家に帰らなくてはいけない、今日は家に帰られますか？」などと話しかけられる。他の利用者は丁寧に「今日は一緒に泊まりですよ」と答えられ、それを聞いたA様は「そうですか」と納得されるもすぐに「今日は家に帰れますか」と同じことを聞かれる。耳が遠いため声が大きく、そのやり取りを何度もしているとほかの入居者も影響を受け不穏になってしまうことがある。

平成 28 年 12 月

「八幡行きの電車は何時かね？」と職員も何度も尋ねられる。聞こえる側の右の耳から大きな声で話しかけるが、納得してもらえないことが多くなる。

息子さんや娘さんの名前を出し、根気良く声掛けを行うことで安心される。

家族の方が面会に来られたあとは、他の利用者に家族のことを話されていて楽しそうだった。

平成 29 年 11 月

夕方になると帰宅願望が多い傾向であったが、お昼ごろから「子どもはどこに預けていますか？」「今日泊まることを家の人に言ってこなかった。このままだと家の人に怒られてしまうので帰らせてください」などの言葉が増え、自分がどこにいるのか知りたがるが増えた。その都度職員が「お子さんは私たちが預かってお世話していますよ」「お家の人には私たちが連絡して了承を得ていますよ」と声をかけると納得され、「よかった」と笑顔をのぞかせる。

平成 30 年 3 月

声掛けでの安心感や、ショートステイからの仲の良い入居者が同じユニットに入居し、会話もされているが、子供への思いは変わらず。

平成 30 年 6 月

自分で家に帰ろうと、ユニットの廊下を自操する姿が多くみられるようになったが、職員と一緒にユニットの廊下を回ったり、洗濯物をたたんでいただいたり、職員が昔の話を聞き出し会話することで落ち着く様子が見られる。

【取り組み 1】

子供に対し、当初職員は「もう帰りましたよ」「遊びに行ってますよ」と声を掛けていたが、そのことが「子供がいない」と余計に不安にさせてしまう。

「迎えに行かなくちゃ」「誰かお金を貸して下さい」と落ち着かなくなり、もちろん食事も摂っていただけない。

カンファレンスで話し合い、「きーちゃん」の存在を認め、全員で共有することにする。

【結果】

職員が存在を認め、「気持ち良さそうに寝ていますよ」など声かけをすると。「まだ寝てるんかい」と優しい表情を見せ、いないことの不安はなくなった。

【取り組み 2】

背負っている子供に食べさせようと食事を摂ろうとせず、食事量が減っていることについて、幼くして亡くした長女への想い、母親としての想いをどう尊重し対応していくのか検討する。

スプーンで食事をすくい、背中に向けて見えない「きーちゃん」に食べさせようとするため、後ろで受け取り、皿に戻してみるのはいかがでしょうか。

「きーちゃんはもうお腹いっぱいになって眠っていますよ」と声をかけてみることにする。

自操についても、変わらず一緒に回る、または見守りを行う。

【結果】

職員が子供は寝ていると声掛けや眠っている声かけや、ジェスチャーを行うと「寝ているのなら起こすのもかわいそう」と再び食事を始める。また、「きーちゃん」が寝ていると聞いて食事をやめてしまうときがあるので、「きーちゃんにはAさんのご飯とは別にご飯を用意してありますよ」と声かけをすると安心して食事を始めるようになった。

自操についてもA様が納得するまで付き添い、上肢の機能低下の防止になっている。

今まで右利きだったA様が、左にスプーンを持ち、右側から「きーちゃん」に食事を食べさせることを続け、右手でも左手でも食事が摂れるようになったのは驚きだった。

【考察とまとめ】

何十年経っても心から消えることのない、幼くして亡くしてしまった「きーちゃん」への想いはどれ程切ないものだったのか、自分達には想像もできない。

年齢と共に認知機能が低下し、「きーちゃん」がいることがA様の生活には当たり前のことになり、食事中が特に顕著に現れることから、お腹を空かせたら可哀想という母親として当然の思いである。

A様が「きーちゃん」と一緒に安心した生活ができるよう、職員はA様の気持ちを尊重した声掛けを行うことが大切であると思う。食事を子供に上げようとする行為もA様が食事を摂るモチベーションになっていると考えられるので、否定はせずに本人が納得、または本人の子供に対する思いに寄り添った対応を第一にしていくことが大事である。本人の意思の否定を行わないことが不安の軽減につながり日々穏やかに過ごしていただけたと考えられる。

最近「背中に負ぶっているから寝られないんだよ」とベッド上で丸い背中をより丸くして座っている姿を見るようになった。

「きーちゃん」もお母さんの温かな背中が心地良いのだろう。

今回の事例を通して、一人ひとりの生活歴を知り、人物像を観察することで様々な気付きや新しい発見や驚きがあり、その全てを受け入れることで職員も教えられ、成長できるのだとつくづく思った。

その人らしく納得した生活を支えることができるのは、介護職ならではのやりがいではないかと思う。

「きーちゃん」は今でもA様と共に生きている。